

# 隨泉寺寺報

平成19年(2007年) 3月号 第439号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季彼岸会法座

講師 坂町西林寺住職 河野行昭師

講題 『いのちより大事なもの』

『願はくは 花の下にて春死なむ その如月の望月のころ』 西行法師

「願うのは桜の花の咲いているときに死にたいものだ。

如月の満月の日 2月15日お釈迦様の入滅のとき頃に」

西行法師の詠んだ短歌です。ところで、如月といえば2月。その2月に桜が咲くとは、一寸変ですね。前にこの歌を紹介したとき、如月だから花は梅だろうと推測しましたが、やはり桜の花のようです。西行法師の時代は、当然ながら旧暦が使用されていたのでした。冬は10月から12月まで、春は1月月から3月まで、夏は4月から6月まで、そして秋は7月から9月までとされていきました。そして、もっとも大事な季節の目安になるのが二至二分。即ち、春分と秋分、そして夏至と冬至です。冬至は11月、春分は2月、夏至は5月、そして秋分は8月とするように決められていたのです。したがって、如月の望月は4月の初めとなり、桜の花盛りでしょう。又2月の15日はお釈迦様の御入滅の日(涅槃会)です。西行がなくなったときは2月16日。降りしきる桜吹雪の中で、きっと笑顔で…。桜の花が満開の春たけなわな頃の情景が目に浮かんできます。

## 3月の法座予定

- 3月11日……………掃除 桑原・瀬野川団地
- 3月14日昼席午後1時より……………春季彼岸会法座
- 3月14日夜席午後7時半より……………出張法座 桑原集会所
- 3月15日朝席午前10時より……………春季彼岸会法座
- 3月15日昼席午後1時より……………春季彼岸会法座
- 4月 2日午後4時より……………門信徒会本部役員会・花見



## ☆さかさまの絵

二紀展に行ってきました。毎年楽しみにしていますが、いつもすばらしい作品が多数出展されています。長者原東の椿谷通俊さんの作品も出展されていました。毎月のお参りのときに出来上がる過程を時々見せていただいていたので、入選されるのは確信していました。県立美術館に展示されているところは、我が子の発表会を見る感じでドキドキしました。今年の作品は今までより色使いがカラフルで、近くで見るといろいろな色が使われているのに驚きました。絵をみるのは大好きです。山は緑、空は青くらいの知識です。しかし絵をゆっくりみるといろいろな色が使われています。葉っぱのみどりにしても、光のあ



たっているところと影のところでは違いますし、虫に食われているところは茶色かもしれません。いろいろな色が混ざり合って深い色を出しているのです。

実は僕は絵を描くのは大嫌いでした。小学校、中学といつも成績表は3でした。中学3年のとき写生大会で川に描きに行きました。いつものことであまり上手に描けません。うまく描けた人は金賞とか銀賞で廊下や講堂に張り出されます。それまで一度も張り出されたことなどありません。それが友達が『お前の絵が金賞に選ばれて講堂に張り出されている』というのです。びっくりして行って見ました。金賞が何枚もあり、どれを見ても自分が描いた絵とは違うのです。よく見ると一枚の絵の下に僕の名前が書いてあるのです。しかしどうも僕が描いた絵とは違

うのです。何と僕の絵を上と下をさかさまにして張ってあるではありませんか。僕の絵はさかさまに見るといいのです。嬉しいような悲しいような複雑な思いでした。しかしそれから絵を描くことが好きになりました。

## ☆米寿の祝い

長者原西の西川元さんは3月で88歳の米寿を迎えられます。これをお祝いして娘さんの西川邦子さんが何を記念に送ればよいかと考えられて、『生前院号』を贈られることにされました。88歳ですから旅行に行くには足元が不安ですし、美味しいものもそんなには食べられません。服やネクタイも今までにあるでしょうし、何を贈ればお父さんが本当に喜んでくれるか考えられたようです。その結果『生前院号』を贈ることにされました。

法名は仏弟子になったときに御門主様からつけていただきます。院号は御褒美です。御法義繁盛のために尽くした人にお礼の意味で送られます。娘さんがお父さんのためにお礼の意味で贈られるすばらしい米寿の贈り物だと思います。



# 東井 義雄カレンダー 3月

## 生かされて生きる

### 私のよろこび

未知の女子大生から手紙を貰ったことがあります。「友だちの意地悪に耐えられないので自殺を決意したのですが、偶然目に入ったテレビの中で先生の話聞き、この方に相談してからにしようと思ってペンを執りました」という手紙でした。

私は、天地いっぱいにもちみちてくださる大なるものの願いに願われ、生かされて生きる私の喜びの実感を手紙に書き速達で送りました。

さいわい、自殺を思いとどまってくれたばかりか、こんなすばらしい世界に生かされながら、それを知らずにきた私がはずかしい。意地悪の友だちのおかげで、こんなすばらしい世界に目覚めさせていただくことができたのですから、今では、友だちを拝みたい気持ちです、と返事をくれました。

今の日本の「大なるものの願い」に背を向けてしまっている学校教育の中で、この女子大生は「死」に追い込まれてしまうところだったのです。



## 微妙

先日新聞の投書に、最近の若者が良く使う言葉というものとして、「やばい」「微妙」というものがあるという指摘がありました。確かに最近良く耳にする言葉ではないでしょうか。やばいという言葉は『この間飲んだジュース、まじ やばいよね、癖になりそう。』とか『あそこのお店、チョーやばいよね、リーズナブルだし、場所もいいし人もいい』という風に使うようです。手がつけれないほど、のめり込みそうな。魅力がありすぎる。すごくいい。という意味なのですか、この時のやばいは『なかなかいい』という意味のようです。私たちが使っていたやばいは、あまりよくないという意味で使っていました。言葉の意味が逆になって使われているようです。

又同じように使われていた言葉で『微妙』と言う言葉があります。テストの手ごたえはどうかと聞かれても「微妙」。クラス替え後の新しいクラスの印象を聞かれても「微妙」と返ってくるそうです。あまりよくないという表現の一部のようです。だめでは言

い方がきついで微妙と表現するのです。一言で済む手軽さ、そしてあいまいさという意味では、なるほど使用頻度が高くなるのもわかるような気がします。友達同士では相手を傷つけない、傷つけられたくないという心理が働くからでしょうか、また大人に対しては、コミュニケーション自体を放棄しているようにも思えます。

国語辞典では 【び-みょう】【微妙】 妙

- ① 美しさや味わいが何ともいえずすぐれているさま。みょう。玄妙。「一な調べ」
- ② 細かい所に複雑な意味や味が含まれていて、何とも言い表しようのないさま。「一な関係

とあります。これは否定的な言葉ではなく、勝れていることを表すようです。もともと微妙とは仏教用語で仏様の計り知れぬ徳をたたえて言う言葉です。仏教辞典では

【み-みょう】【微妙】と読みます

- ① 功妙の。聡敏の。計り知れぬほど深くて見事な。言うに言われぬ不思議さ。
- ② 善に同じですばらしい様。

微妙の色身とか、微妙音とか微妙心という風に用いられます。

親鸞聖人は御和讃の中で

宝林・宝樹微妙音 自然清和の伎楽にて

哀婉雅亮すぐれたり 清浄楽を帰命せよ

お浄土の音楽は清らかで調和が取れていると讃嘆されています。

ですから此の親鸞聖人はお浄土のすばらしさを【微妙】と顕されたのです。

しかし残念ながら今は否定的に使っているようです。言葉は変化するものなのです。

## お彼岸

春の彼岸が近づいてきました。この時期になると、テレビをつけるとお墓に花を供えてお参りする人たちの映像が映し出されています。「お彼岸」は先祖を供養する儀式として、季節の風物詩というか、風景になっている感じがします。日本の年中行事の一つとして定着している「お彼岸」ですが、そもそも「彼岸」とは、何なのでしょう？

「彼岸」は読んで字の如く「彼の岸」と書きます。これは「此岸」、「此の岸」に対応した言葉なのです。今私たちが暮らしている世界を「此の岸」といい、それに対して真実の世界を「彼の岸」『彼岸』と呼ぶのです。

暑さ寒さも彼岸までといわれるように、一年中で一番過ごしやすなのが彼岸の頃です。此の時を選んで、生きていくのに一番大切なこと『真実の世界』【お浄土】についてを考えてみましょうと、春と秋の一週間、聖徳太子が始められたといわれています。『真実の世界』【お浄土】に帰られた先祖のご恩を考えてみましょうということです。それが先祖をしのぶ仕事としてお墓参りになったのでしょう。